

11

ナショナリズムの時代としての近代

— 国民は想像の産物か —

前回のまとめ

前回は、「世俗化」について学んだ。社会の連帯力(秩序維持)の強化とともに、人や社会、世界などに意味を与えていたかつての伝統社会における宗教が、近代の合理化が進むなかで「世俗化」していき、その影響力が衰え、現代においては、「運命」ではなく、「選択の対象」となった。

今回の主題

今回は、「近代世界の形成と再形成とに果たした力は明白でありながら、それに取りつかれていない人間には依然として他人事で理解不可能なままにとどまっているナショナリズム」の起源と発展についての基本的な学説を学ぶことが目的である。

KEYWORD

「ネーション(nation)」
原初主義

「ナショナリズム(nationalism)」
道具主義

ナショナリズムの歴史的過程 ①

・第1期：君主制的主権国家の時代（16世紀宗教改革にはじまり、19世紀初頭のナポレオン時代）

「ネーション」は国家の主権者たる君主諸侯と同一化された概念であり、多くの一般民衆はその「ネーション」から排除されていた。君主は戦争と貿易を通じて、国家の政治的・経済的単位としての自律性を強めたが、戦争は基本的に君主諸侯の間の戦争であり、重商主義にもとづく貿易政策も君主の財政力を富ますことを目的としたものでしかなかった。度重なる戦争を通して「ネーション」の間の「国際（＝インターナショナル）」関係ができあがり、国際法と国際条約が国際関係のルールとして形成される。しかしその国際関係も君主諸侯のあいだの関係にすぎず、**彼らの共通の利害や婚姻関係、共通の文化・伝統にもとづく「インターナショナリズム」によって支えられていた。**

ナショナリズムの歴史的過程 ②

第2期:「民主的ナショナリズム」(ナポレオンの時代から1914年の第1次世界大戦開戦にいたるまで)

フランス革命とナポレオン侵攻の結果、ヨーロッパ中にナショナリズムが広まった時代でありながら、ヨーロッパの国際秩序は保たれ、戦争も少なかった。一方で、ルソーやジャコバン派の思想を契機にして、それまでの君主諸侯に限定されていた「ネーション」の概念は「民主的」なものへと変貌し、自由で平等な個人の権利を主張する思想が広くみられるようがある。しかし、そのような「民主的ナショナリズム」も、**その実際の担い手は財産を所有した中産階級であった。**

ナショナリズムの歴史的過程 ③

第3期:「大衆ナショナリズムの時代」(第一次世界大戦前後)

この時代に起こったナショナリズムの変化は三つの社会的要因によるものとされる。

①「**ネーションの社会化**」＝産業化、都市化、労働運動の展開、義務教育制度導入や参政権拡大などの結果、一般大衆が「ネーション」のメンバーとして参画するようになった。その結果、政府も「ネーション」のメンバーたる人民全体の福祉に尽くさねばならなくなる。そうしてナショナリズムは次第に社会主義と結びつき、労働者も「祖国」をもつようになる。この時代のナショナリズムの激化は、何よりもこうした「ネーションの社会化」に起因するところが大きい。

②国民国家が「レッセフェール」政策を改め、次第に経済的機能を強めていたことである。

③「ネーション」の数の増大である。「民族自決」を掲げた多くの中小の「ネーション」が独立した。こうした「ネーション」の増大が経済的格差と結びつき、経済的資源や機会をめぐる勢力圏争いが発生することになる。

ナショナリズムの歴史的過程 ④

- ・このようにして「社会化」された「ネーション」が両大戦での「総力戦 (total war)」を可能にすると同時に、戦争がまた「ネーション」の「社会化」を促進することにもなる。戦時には軍民の差なく男女ともに戦争に動員される。つまり、戦争は、一部支配者間の戦いから、「国民」間の戦いへと変貌した。
- ・これまで支配者間の「インターナショナル」な関係によって支えられていた国際秩序も崩壊したのである。国際法や国際条約はもはや、国民(=「ネーション」)の福祉を侵してまでも遵守すべきものとは見なされなくなった。
- ・しかし、また「社会化されたナショナリズム」は「個人」の価値を「ネーション」に従属するものとする全体主義的論理へと発展した。

「ネーション」という概念をめぐる二つの立場 ①

「ナショナリズム」に関する研究は、「ネーション」概念をどのように設定するかによって、その方向と評価が変わる。「ネーション」概念は「ナショナリズム」研究の出発点であり、同時に結論でもある。

「原初論 (primordialism)」	「道具論 (instrumentalism)」
<ul style="list-style-type: none">・「ネーション」の永続的性格を強調・「ネーション」の起源は近代以前(過去)から継続的に存在した「エトニー (ethnie)」に求める。・人種的共同体の永続性に注目して「ネーション」は種族、祖先、宗教、言語、領土という原初的紐帯に基づくと主張	<ul style="list-style-type: none">・「ネーション」形成の歴史的側面(近代の産物)を強調・「ネーション」は近代化と都市化という特定の歴史的条件のなかで現れたイデオロギーとみなし、その歴史性を強調・「民族自決」など政治経済的目標達成のための道具・歴史を恣意的に利用・構築(「伝統のねつ造」)・「想像の共同体」

「ネーション」という概念をめぐる二つの立場 ②

「ネーション」に関する「原初論」と「道具論」との対立の延長線上に、さらに次のような二つの立場が置かれる。

「客観主義的」立場	「主観主義的」立場
<p>この立場は、言語、共通の文化遺産、宗教、慣習などのような客観的規準を「ネーション」の基礎として強調する。「ネーション」は国家に先行し、共通の歴史的価値と社会的紐帯に基礎を置く実在であるとされる。したがって、「ナショナリズム」もこのような原初的紐帯感が量的に成長したものであるとされる。</p>	<p>この立場は、「ネーション」形成の歴史性を強調する。つまり、ある特定の共同体に自らを帰属させようとする個々人の主観的意志が「ネーション」を作ったとされる。そして、「ネーション」に対する人民の自発的帰属意志を呼び起こした歴史的契機は「進歩的・解放的」理念としての「ナショナリズム」を生んだフランス革命であるとされる。</p>

「ネーション」という概念をめぐる二つの立場 ③

「原初論 (primordialism)」 「客観主義的」立場	「道具論 (instrumentalism)」 「主観主義的」立場
ヘルダー (Johann Gottfried von Herder) シルズ (Edward Shils) マイネッケ (Friedrich Meinecke) ビトラム (Reinhard Wittram) ノイマン (Franz J. Neumann) などのドイツ学派が中心	コン (Hans Kohn) ヘイズ (Carlton Hayes) ケドゥーリ (Elie Kedourie) ゲルナー (Ernest Gellner) アンダーソン (Benedict Anderson) などの英米学派が中心

しかし、「ネーション」は、いずれかの立場、すなわち「原初論」的にも、「道具論」的にも十分に規定できない、とする折衷的な立場がある。代表的には、アンソニー・スミス (Anthony D. Smith) が挙げられる。彼の議論では、「ネーション」の起源は原初主義的な立場に近く、「ネーション」への成熟を近代に見出す点で道具主義 (近代主義) 的である (「エスノ・ナショナリズム (ethno nationalism)」)。

「ネーション(nation)」の語義の変遷

- ①「nation」の語源、ラテン語の「Natio」の直接の語義は、「(おのずから)生まれてきたもの」ということであり、古代ローマは、この語によって、同じ地域を出目とする外国人のグループを指示していた。彼等はローマ市民よりも低い地位にある周辺的な住民として扱われた。
- ②中世になると、「ネーション」は教会共同体の諸党派を指示する語として利用されたが、諸党派の代弁者は、世俗的にも宗教的にも有力者であったために、教会共同体を代表するような文化的・政治的な権威やエリートを意味するようになったが、その後「ネーション」が特別なエリートではなく、「人民」の共同体を指示するものとして使われた最初の事例は、絶対王政下のイギリス(16世紀初頭)に見られる。
- ③このように、「ネーション」という語には、歴史のなかで反対の意味が重層的に積み込まれてきたことになるが、一応、「ネーション」に関しては、第一に、生活様式の同一性に基づく自生的な単位であること、第二に、内部のコミュニケーションが直接の対面可能性の範囲を大幅に超えて広がっており、抽象的な統一体と認知されていることと暫定的に定義しておこう。

語源：ラテン語natio（生まれ）

- ・「nation」は起源を同じくしたり、生活習慣を共にしたり、ある一定のまとまりをなす人の集合を指す。語源はラテン語の「生まれ」を意味する動詞、「natum」から派生した「natio」であり、「生まれ」によって結ばれる人の集団ということにある。
- ・政治的組織体としての「state（国家）」とは、区別される。そのため、「state」が消滅しても「nation」は存続しうるし、複数の「nations」が一つの「state」を構成することもありうる。
- ・「nation」がつねに一つの「state（国家）」を想定させるような「国民」という訳語は、実はそれ自体が「nation」が「state」と不可分になった時代、つまり「nation-state（国民国家）」体制を前提とした訳語である。

アーネスト・ゲルナー 産業化に起因する「ナショナリズム」概要

アーネスト・ゲルナー『民族とナショナリズム』（加藤節監訳、岩波書店、1983=2000年）

①ゲルナーの「ナショナリズム」定義

「ナショナリズムとは、政治的な単位と民族的（文化的）単位とが一致すべきだとする一つの政治的原理である。感情としての、あるいは運動としてのナショナリズムは、この原理によって最も適切に定義することができる。ナショナリズムの感情とは、この原理を侵害されることによって喚び起される怒りの気持ちであり、また、この原理が実現されたときに生じる満ち足りた気分である。ナショナリズム運動とは、この種の感情によって動機づけられたものにほかならない」(1頁)

②ゲルナーの人類史三段階区分

狩猟採集中心の
前農耕社会



農耕社会

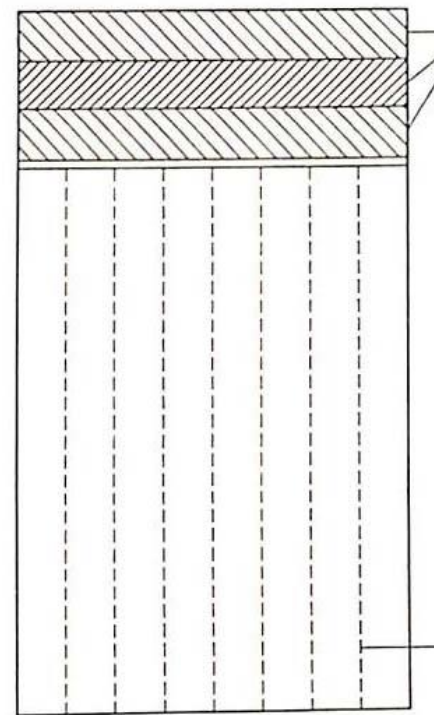


産業社会

①農耕社会における二つの発明
「国家と文字」
・少数の支配層による権力と知識の独占

②農耕社会の政治単位
「地方的な自治共同体と大規模な帝国」

・ゲルナーによれば、国家が登場するのは、農耕社会においてであり、そのためナショナリズムの成立についての考察も、農耕社会以降に絞られる。



軍事的、行政的、聖職射的な、
そして時には商業的な支配
階級の階層化、水平的に分
離された成層

横のつながりを断たれた
農耕民の共同体

図1 農耕社会の社会階級の一般形態
(『民族とナショナリズム』17頁)

「ナショナリズムの登場」 「農耕社会」から「産業社会」へ

- ①ゲルナーの「ナショナリズム」の定義はとても明快である。また、その原因についても明快に、単一の原因、つまり「産業化」をもって「ナショナリズム」を説明する。
- ②「農民の小共同体は、一般に内向きの生活を送るものであり、政治的指令によってではないとしても経済的必要性によって地域性にしばられている。」^(17頁)ため、このような社会では、「ナショナリズム(政治的単位と文化的単位とを一致させること)」は問題にならない。
- ③「永久の椅子取りゲームを運命づけられた社会」としての「産業社会」

「近代社会は、平等主義的であるが故に流動的なのではない。流動的であるが故に平等主義的なのである。さらに、近代社会は望むと望まざるとにかかわらず流動的でなければならない。この理由は、経済成長に対する凄まじく癒しがたい渴きを満足させるために、そうあることが求められる点にある。」^(42頁)

④流動化と分業化が進む産業社会の労働は、見知らぬ者同士がコミュニケーションを取らざるをえず、そのために、標準的な文法と読み書き能力を必要とする。そして、国家の政治的な領域が、読み書き能力を基礎にした同質の高い文化が流通している範囲と合致することを求める政治原理、つまり「ナショナリズム」が成立することになる。

⑤「ネーション(民族)」は、「ナショナリズム」を通じて生み出されたものであるとする。つまり、産業化が引き起こす職業構造の流動化(の結果としての平等化)と職業構造の変質が、文化的単位と政治的単位とを一致させるシステムとしての「ネーション」を要請したと、論じる。

⑥明快ではあるが、ゲルナーの論理がもつ限界としては、第一に、宗教にも比すべき、ネーションへの深いコミットメントの由来を説明できない点、第二に、「ナショナリズム」に固有の、平等化と普遍化に抗する差異化・特殊化への執着を説明できない。

ベネディクト・アンダーソン 「想像の共同体」概要

ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』

(白石隆・白石さや訳、リブレポート、1983=1987/NTT出版、1991=1997増補版)

三つのパラドクス

- ①歴史家の客観的な目には国民(ネーション)が近代的な現象に見えるのに、ナショナリストの主観的な目にはそれが古い存在に見えること。
- ②社会文化的概念としてのナショナリティ[国民的帰属]が形式的普遍性をもつものに対して、それが具体的にはいつも、手の施しようがない固有さをもって現れ、・・・それ独自の存在となってしまうということ。(どの国民も自らを他の国民とは異なる固有性をもつ独自の存在であると主張)
- ③ナショナリズムのもつあの「政治的」影響力の大きさに対し、それが哲学的に貧困で支離滅裂だということである。別の言い方をすれば、ナショナリズムは、他のイズム[主義]とは違って、・・・いかなる大思想家も生み出さなかった。

三つのパラドクスが示す事実

①「ナショナリズムの両義性」(＝「普遍主義と特殊主義の交錯」)

- ・近代的でありながら古代的なものとして現象するという歴史的・時間的な両義性
- ・普遍主義と特殊主義の両方の規定を兼ね備えているという内容的・空間的な両義性
- ・普遍主義と「ナショナリズム」の共存を最も端的に示すのが、「ナショナリズム」の政治的主張が、つねに民主制への要求とともになされているという事実である。

②「明快な事実と分析・説明の困難」(＝「ネーション」の空虚さ)

「ナショナリズム」は、個人における「神経症」と同様、近代発展史の不可避の病理であり、神経症と同じように本質的にあいまいでやがて痴呆症へと陥っていくものであって、広く世界に蔓延した無気力感のジレンマに巣くった(社会小児病ともいうべき)ほとんど不治の病である。」(＜トム・ネアンの嘆き＞ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』23頁)

「私は、ネーションについてのどのような「科学的定義」も案出できない、と結論するほかない。しかし、そのような現象自体は存在してきたし、いまでも存在している」

(＜ヒュー・シートン・ワトソン＞大澤真幸『ナショナリズムの由来』73頁より重引用)

「想像の共同体」

①想像された共同体

アンダーソンは、このパラドクスを理解するためには、国民を具体的な実体として考えるのではなく、国民を「イメージとして心に描かれた想像の政治共同体として捉えている。

「国民とはイメージとして心に描かれた想像の政治共同体(イマジンド・ポリティカル・コミュニティ)である。・・・国民は[イメージとして心の中に]想像されたものである。というのは、いかに小さな国民であろうと、それを構成する人々は、その大多数の同胞を知ること、会うこと、あるいはかれらについて聞くこともなく、それでいてなお、ひとりひとりの心の中には、共同の聖餐(コミュニオン)のイメージが生きているからである。」(24頁)

「国民は一つの共同体として想像される。なぜなら、国民のなかにたとえ現実には不平等と搾取があるにせよ、国民は、常に、水平的な深い同志愛として心に思い描かれるからである。そして結局のところ、この同胞愛の故に、過去二世紀にわたり、数千、数百万の人々がかくも限られた想像力の産物のために、殺し合い、あるいはむしろみずからすすんで死んでいったのである。」(26頁)

②三つの特徴

- ・「国民は限られたものとして想像される。(例:限られた国境)」
- ・「国民は主権的なものとして想像される。この国民の概念は、啓蒙主義と革命が神授のヒエラルキー的王朝秩序の正当性を破壊した時代に生まれたからである。」
- ・「国民は一つの共同体として想像される。なぜなら、国民のなかにたとえ現実には不平等と搾取があるにせよ、国民は、常に、水平的な深い同志愛として心に思い描かれるからである。」
- ・「国民の本質とは、すべての個々の国民が多くのことを共有しており、そしてまた、多くのことをおたがい**すっかり忘れてしまっている**ということにある」(ルナン)
- ・「ナショナリズムは国民の自意識の覚醒ではない。ナショナリズムは、もともと存在していないところに**国民を発明することだ**。」(ゲルナー)

国民を想像(イメージ)することを可能にした 三つの基本的文化概念

①「宗教共同体」

(聖書のラテン語、コーランのアラビア語、中華世界における漢字などのように特権化された「聖なる言語」と、それらによって綴られ、語られる世界像によって、世俗的に用いられる言語や文化の違いを超えて人びとを支配し、結びつけていた。)

②「王国」

(宇宙論敵摂理にもとづいた「高き中心」たる王を中心に、異なる地域や文化に属する人びとを統合する政治的世界として想像されていた。)

③「時間」

(均質で空虚な時間の暦のなかを暦に従って移動してゆくという観念は、国民の観念とまったくよく似ている。国民もまた着々と歴史を下降し(あるいは上昇し)動いてゆく堅固な共同体と観念される。)

「偶然を宿命に転じること、これがナショナリズムの魔術である。」

「無名戦士の墓と碑、これほど近代文化としてのナショナリズムを見事に表象するものはない。…これらの碑には、公共的、儀礼的敬意が払われる。…これらの墓には、だれか特定しうる死骸や不死の魂こそないとはいえ、やはり鬼気せまる国民的想像力が満ちている。…こうした記念碑の文化的意義は、たとえば、無名のマルクス主義者の墓とか自由主義戦没者の碑とかをあえて想像してみれば、さらに明らかとなろう。…マルクス主義も自由主義も、死と不死にあまり関わらないからである。一方、ナショナリズムの想像力が死と不死に関わるとすれば、このことは、それが宗教的想像力と強い親和性もっていることを示している。」

(『想像の共同体』32頁)

①墓碑の匿名性

- ・墓碑の匿名性が意味していることは、人々は、ネーションという共同体に帰属していると思われている限りでは、具体的な特定の人物という資格においてではなく、抽象的で形式的な個人（たとえば、アメリカ人、フランス人、日本人、韓国人のように）として、である。
- ・ナショナリズムが、死や不死についての観念と結びついているということを示している。「ネーション」のための殉死者が匿名的なままで記念されるということは、個人の生の時間を超えて、はるかな過去に「ネーション」の起源を求めていることを意味する。

②「ネーション」と死

「ネーション」は、人間個体の不可避の死という事実に対する近代的な対応である。伝統的には、この問題に対応してきたのが「宗教」であった。宗教は、たとえば、個体の有限な人生を一部に組み込むような、大いなる因果関連を想定することによって、あるいは死後の生が営まれる来世や神の国の教説によって、個体の死という運命を不死性へと反転させてきた。近代にあっては、「ネーション」と「ナショナリズム」は、宗教と宗教的共同体の役割を代補した、という（20世紀の二つの大戦と共同体の存続と個人の死の意味づけ）。

「出版資本主義(プリント・キャピタリズム)」

- ・「同胞愛」「権力」「時間」を新しく意味あるかたちでつなげたのが、「出版資本主義(プリント・キャピタリズム)」である。これは、「ますます多くの人々が、まったく新しいやり方で、みずからについて考え、かつ自己と他者を関係付けることを可能にした。」(64頁)のである。
- ・「同時性は、・・・時計と暦によって計られるものとなった」(24頁)。このような新しい同時性の観念を生み出したのは、商品としての出版物(小説と新聞)の発展(「出版資本主義」)であったこの同時性の観念の創出をもって、「水平・世俗的、時間・横断的」なタイプの共同体を想像することが可能になったのである。
- ・アンダーソンが「出版資本主義」によって示そうとしたのは、出版物による「ナショナリズム」のプロパガンダが津々浦々に流通し、人々がそれらによって「ナショナリズム」を刷り込まれたということではなく、国民を想像する条件である時間と空間の概念の変化である。つまり、時間と空間に関する認識の変化がなければ、国民のようなタイプの共同体を想像することは不可能であったということである。

古典的ナショナリズムと現在のナショナリズム

①古典的ナショナリズムの三つの類型(アンダーソン)

- ・「俗語」の普及運動に主として媒介された民衆的なナショナリズム
- ・植民地におけるナショナリズム
- ・公定ナショナリズム

(強力な指導的権力を通じて、特定の政治的領土に文化的同質性、生活様式の同一性を人為的に強制して作られたもの)

②現在のナショナリズムの二つの方向

古典的なナショナリズムは、局地的な共同体に分立している人々を国民化する運動であったが、現在のナショナリズムは、古典的ナショナリズムが創出した「国民」を対立する二つの方向へと引き裂こうとする運動のなかで立ち現れる。

- ・国民を(あるいは国民国家を)、民族という、共同性のより小さな単位へと分解する運動。
- ・国民を、インターナショナルな、より大きな政治的単位の中に還元しようとする運動

大澤真幸『ナショナリズムの由来』(645-646頁)

大澤真幸「アイロニカルな没入」としての「ナショナリズム」

- ①大澤真幸によれば、普遍的なものへの志向と特殊なものへの志向とが交錯するところに「古典的ナショナリズム」が成立したという。つまり、「ナショナリズム」はきわめて近代的・普遍主義的な現象でありながら、その実現は一つの国家の範囲に限定されることから、特殊主義の信仰へと反転してしまう。
- ②かつての「古典的ナショナリズム」とは違い、現代の「ナショナリズム」は、もはや普遍主義的な理念ではなくなり、「ネーション」も人びとの「規範」を担保するものではなくなりつつある。したがって現代における「ナショナリズム」は、「アイロニカルな没入」でしかないという。
- ③「アイロニカルな没入」とは、意識の上では、批判的な距離を取って、対象を相対化していながら、行動の上では、その対象への執着を逃れることができないような状態（「わかってはいるが、やめられない」というような状態）を指す。

まとめ

- ①「ネーション」・「ナショナリズム」に関する研究は、その研究主体が属した共同体の歴史的経験に大きく規定されている。したがって、これらに関する概念や理論はある共同体の歴史的経験の数だけ多様である。
- ②「ナショナリズム」は理念的可変性をもつ。すなわち、それ自体は社会変革や政治的行為の指針を提供できず、他の社会イデオロギーと結合して現れる（「2次的イデオロギー」）。したがって、重要なことは「ナショナリズム」がいつ、なぜ、そしてどのように他の社会イデオロギーと結合したのかである。
- ③「ネーション」は認識の主題ではなく、信仰の主題でもあった。アンダーソンによれば、伝統的には、個体の死の可能性に対応してきたのが宗教であったが、近代では、「ネーション」と「ナショナリズム」が宗教と宗教的共同体の役割を代行した。
- ④現在のナショナリズムは、一方では国民を共同性のより小さな単位へと分解する方向に進み、他方では、より大きな政治的単位の中に還元しようとする方向に進もうとしている。

【参考文献】

- ・E.H.カー『ナショナリズムの発展』(みすず書房、大窪愿二訳1952年、1972年／新版2006年)
- ・ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』(白石隆・白石さや訳、NTT出版、1997〈増補版〉)
- ・アーネスト・ゲルナー『民族とナショナリズム』(加藤節監訳、岩波書店、2000年)
- ・大澤真幸編『ナショナリズムの名著』(平凡社、2002年)
- ・大澤真幸『ナショナリズムの由来』(講談社、2007年)